



令和4年度

鹿児島県の教育

1月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部長

道添辰也
秀島市立国分北小学校長

職人技の継承

夏休みに職員でバドミントンをしたのをきっかけに「北スポ部」を立ち上げ、毎週多い日には一〇名を超える職員で汗を流している。若手に加え、経験のあるベテランも参加しているのが嬉しい。打ち合ううち、穏やかな性格なのにベテランに容赦なく強打を叩き込み、雄叫びを上げる若手、若手の良き相談相手なのにネット際の小技で相手を翻弄し、不敵な笑みを浮かべるベテランなど、普段とは違った面が垣間見られ、職員間の距離が縮まったように感じている。

先日、霧島市校長協会・教頭会合同自主研修会として九州タブチ代表取締役 鶴ヶ野未央氏の講演会を開催した。同社は、生活に欠かせない水を届けるためのバルブや継ぎ手を製作している会社である。人材確保が大きな課題である昨今において、離職率が極めて低く、鹿児島県で初めて日本経営品質賞を受賞した会社として知られている。鶴ヶ野氏は会社経営において何より人づくりを大切にしていると言われた。企業ではナレッジマネジメントという手法により、経験や感覚など伝えるのが難しい「暗黙知」を文字や式・図表など誰にでも確実に伝えられる「形式知」にし、活用できるよう取り組んでいるという。しかし、いくら高度なコンピュータが制御する精密な製作機械を保有していても、最後は職人

の技術（＝暗黙知）が不可欠であり、職場の良好な人間関係による離職率の低さがなければ、技術を確実に継承していくのは難しいと話された。

以前、将来どんな教師になりたいか尋ねた時、「職人のような教師になりたい。」と答えた若手がいた。的を射た答えである。教師もある意味職人であり、他の職人同様「暗黙知」で仕事をしている部分が多い。我々教師は長い間、「形式知」として学んだことを、先輩から指導されながら実践を積み重ねたり、上司から聞いた経験談や感覚論を取り入れたりして自分自身の「暗黙知」として定着させ、さらに後輩に伝えてきた。この学校現場での「暗黙知」の継承システムが、コロナ禍によって加速された職員間の人間関係の希薄化により、どんどん難しくなってきた。講演を聞き、我々管理職には、学校の経営品質を向上させ得る教師の「暗黙知」の向上と、その継承のための職場の良好な雰囲気づくり、人づくりが求められていると感じた。

遠慮ないスマッシュや相手を翻弄するヘアピンを打ち合えるように意見や経験を本音で伝え合える、少々のことでは揺るがない良好な人間関係ができてきたように感じ、水曜日の「北スポ部」活動日が来るのを心待ちにしている。

令和5(2023)年1月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	14
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	12		



郷土に誇りと愛着を

鉄砲館キッズコンシエルジュ

西之表市教育委員会
種子島開発総合センター所長

沖田 純一郎

種子島開発総合センターは、鉄砲伝来で知られる種子島、西之表市の博物館類似施設です。館内には、教科書に写真が掲載されているポルトガル伝来銃・国産初伝銃をはじめとする国内外の古式銃約百挺を展示していることから、「鉄砲館」の愛称で親しまれています。また、種子島の歴史・自然・民俗に関する約一千三百点の常設展示資料など、種子島のことを総合的に紹介する観光施設としての役割も担い、令和五(二〇二三)年に開館四十周年を迎えます。

館の大きな使命のひとつに、教育・学習施設としての役割があり、西之表市をはじめ島内小中学生の多くは学校行事の一環として、館を訪れています。来館の際は、平成二十二(二〇一〇)年から配置している、鉄砲館コンシエルジュ(展示資料の説明、館のPR、観光案内サービスを担う)による説明をはじめ、種子島の魅力や特徴を伝えるよう努めています。館では、このコンシエルジュの業務を子どもたちが体験することで、郷土種子島のことを知り、伝えること、郷土の魅力を見つめなおすきっかけになるのではと考え、平成二十四(二〇一二)年に鉄砲館キッズコンシエルジュ養成講座を企画し、市内の小学五年生から六年生に募集を行い

ました。講座は夏休み期間中に行い、指導者は鉄砲館コンシエルジュが務め、館の職員がサポートする体制をとり、鉄砲館コンシエルジュの業務全般を体験する内容としました。

講座には五名(女子四・男子一)の参加があり、展示資料について学び、種子島の魅力・特徴、案内の心構えなど数日かけて学習し、その後、鉄砲館キッズコンシエルジュとして、実際に来館者に対して、館内案内を行いました。はじめは、テキストを読みながらの案内でしたが、数日後にはテキストなしで案内ができるまでになり、講座終了間際には、各自テキストに記載がない新たな情報を調べ、伝えるまでに成長しました。閉講式では種子島のことを知ってもらい、お客様に喜んでもらえたことがうれしかった、とてもやりがいがあったなどの感想があり、また、来館者の反応もよかったです。平成二十五年十名、平成二十六年二十三名、平成二十七年には三十名が参加し、男子や複数年続けての受講も見られるようになりました。以後、毎年開催しており、参加者総数は百四十名にのぼり、館の夏休み期間中の恒例企画として定着しているところ です。

一九九一年 西之表市役所入庁
一九九四年 教育委員会社会教育課配属
西之表市教育委員会
種子島開発総合センター配属
二〇一九年四月から
西之表市教育委員会
社会教育課参事兼
種子島開発総合センター所長

参加した子どもたちの多くは、知らないお客様の前で、たくさん種子島のことを紹介できるのは、うれしいという感想が多く、もともと種子島のことを紹介したので、勉強したいとの声もありました。講座を通して、自ら郷土のことを知り、他にはない郷土の魅力を知ることができたのではないかと思います。

種子島は鉄砲伝来、ロケット、豊かな自然、安納芋、サーフィン・アニメの聖地として有名ですが、果たしてそれ以外に誇れるものがあるかとの問いに、島在住の方も含め、多くの人が即答できないのではないのでしょうか。少なくとも、参加した子どもたちの多くは、より多くの種子島の魅力・特徴を語れる一人になったのだと思います。

彼らが成長し、将来、島を離れても、郷土に対する誇りを持ち、多くの人に郷土種子島のよさを伝え、また、郷土の振興に情熱を燃やす人材になることを期待したいです。鉄砲館キッズコンシエルジュ養成講座がその一助となるよう、企画内容を常に更新しながら、今後も引き続き取り組んでいきます。キッズコンシエルジュの案内を体験していただければ幸いです。ご来館お待ちしております。



子供たちを伸ばすために

今 できること

原良小(市) 界 敏 則

一 はじめに

本校に着任してすぐ、四月上旬発行の学校便りにどのようなタイトルを付けるか悩みに悩んだ。学校がイメージできるタイトルを付けようと思ったが時間もなく、子供たちが健やかに成長してくれることを願って、「すくすく伸びる 原良の子」とした。さて、これから八百一人の子供たちを、それぞれどう伸ばしていくか、試行錯誤が始まった。

二 職員の知恵と力で伸ばす

以前、テレビの情報番組で、六人ほどの男性が一心不乱に穴掘りをしている場面が出てきた。これは、「全国穴掘り大会」に向けての練習の様子で、毎年この大会には全国から約三百チーム余りが参加するそうである。大会のルールはいたってシンプルで、スコップ、バケツ、ロープ、はしごを使って、制限時間三十分以内に、どれだけ深い穴を掘ることができるかを競い合う。

深い穴を掘るためには、穴掘リストたちの体力や連携が不可欠であろうが、それと同時に、深く掘り進めるための技術も必要であろう。その技術として、スピードを付けること

や適度に穴の幅を広くすることも大事かと思われる。ちなみに、これまでの最深記録は、三m八十五cmとのこと。結構深い。

このワンシーンを観ながら、大学時代の恩師から、事あるごとに言われていた言葉を思い出した。「専門性を深めるには、一点を深めるだけでなく、隣り合う領域に立ち入りながら、だんだん幅を広げていくことが必要だよ。幅を広げていけば、自ずと深まっていくものだ。」と・・・このことは、元経団連会長の土光敏夫氏の「深い穴を掘るには幅がある」に通ずるものである。

そこで、子供たちの成長のためには、まず私たちが自身が一点を見つめ、直向きに取り組む姿勢をもつことが大事であろう。また、職員には、見つめている一点の周辺にある事柄にも目を向けさせることで、より視野を広げさせ、そうして得た経験や知見をベースに、さらに他の領域についても見識を深めさせ、教師としての力を付けさせたいものである。

三 子供たちに任せて伸ばす

「今日の五・六時間目に、学級のビブリオバトルの決勝戦をしますので、ぜひ、参観に

来てください。」と、五年生の女子児童二人から誘いを受けた。私は、担任主導の下でビブリオバトルのみが行われるものと思っていたが、進行をはじめとする全ての運営が児童の手で行われ、審査時間にはショートタイムがあるなど、真剣な中にも和やかな雰囲気ですべて勝戦が繰り広げられた。あとで担任に聞くと、条件を付けたり助言をしたりはしたが、企画から運営まで子供たちに全てを任せ、子供たち自身の手で最後までやり遂げたとのことであった。

学校における教育活動の多くは、教師が企画、そして準備し、時には運営まで教師が主体となつて行う場合が多い。その方が、ねらいを達成するために、スムーズにいくことは確かである。ただこのような中では、子供たちにねらい以上の力を付け、よりよく伸ばすことはできないのではないかと思ひ、次年度の教育課程に「学年(学級)の日」を年二、三日設定し、前述のビブリオバトルのように、子供たち目線で、子供たち主体の教育活動が展開できるよう模索している。

四 おわりに

昼休みになると、校長室に代わる代わる子供たちが顔を見せる。中学校に勤務していた時にはなかつた状況に最初は戸惑ったが、今ではすっかりコミュニケーションも取れるようになった。この屈託のない笑顔の子供たちを今以上にどう伸ばしていくか、これからも職員と知恵を出し合いながら前に進みたい。



生徒とともに高めよう

野田中(北) 西 一元 ひとみ

一 はじめに

二十八年間教諭として教科・学級・部活動等の指導に取り組んできた中で、生徒一人一人の個性や特性、成長による個々の変容に丁寧に向き合い、生徒の成長を促してきたかと問われると甚だ自信がない。現在、学校経営を進める立場となり、生徒を取り巻く社会環境の著しい変化に対応した「主体的に粘り強く自ら学ぶ生徒の育成」のために、教師・保護者・地域がいかに連携していくべきか日々模索している状況である。

本校は、旧薩摩藩島津家五代発祥の野田郷にあり、野田村の頃より野田高等学校(現在の県立野田女子高等学校の前身)を擁する子弟教育に熱心な環境である。「野田保・幼・小・中連携」による職員研修やPTA活動の連携を図っている。さらに、月一回野田小学校の生徒指導部会に参加し、相互の生徒指導の状況把握に努めている。全学年一学級であり、生徒は義務教育九年間をほぼ同じメンバーで過ごしている。

二 「聞く力」と「聞かせる手立て」

価値観の多様化や情報過多の現代は、生徒を取り巻く環境が以前に比べ大きく変化している。そのような中で顕著に表れているのが、「聞く力の低下」であると考えられる。実際、本校でも学級経営や教科指導において、「生徒が話を聞かない(聞けない)」という話をよく聞く。本校では、学力向上に係る共通実践事項の一つに「聞く力の育成のための聞かせる手立て」を挙げている。お互いの言葉を聞き合う状態であれば、集団(学級)に「受け止められる」心地よさがあふれ、その集団には信頼や秩序が構築される。「聞く力」は、コミュニケーション能力の育成、学力向上の基盤であり、「不易」として古来より大切にされてきたことである。生徒に教師・友だちの言葉を「聞く」とする意志を育む指導が、本校においても急務であると考えている。

私自身、全校朝会等で話をする際、「聞く姿勢(＝しつけ面)」の確認だけでなく、話の途中で全体や個人に問いかけたり、挙手させたりして、生徒が意思表示をする場面を可能な限り設定するようにしている。生徒が「受

け止めている」ことを可視化するためである。時には、話の内容に対する生徒の考えや提案を「生活の記録」等に記入させることもある。生徒の文章から、自分自身の話し方・聞かせ方について振り返る機会としている。今後も、私を含め職員全体の「聞かせる手立て」の技術を高めていきたい。

また、「聞く」ことは、生徒のみに課せられることではないと考える。教師・保護者ともに、「受け止める」ことを大事にしたい。生徒が興味・関心をもって主体的に学びたい、やってみたいと一歩踏み出す時を捉えて、その意欲に寄り添う「応答力」を高めていく。

三 おわりに

令和二年三月に閉校した阿久根市立大川中学校に平成二十七年年度から教頭として三年間勤務した。生徒数の減少を目の当たりにしながらも、「人前力発揮！」のスローガンのもと、全教育活動に生徒・職員一丸となって取り組んだ。「人前力」とは、

- (一) 自信をもって表現する力 (話す力・書く力)
- (二) 他者の思いを受け止める力 (聞く力・読む力)
- (三) 協働してよりよいものを目指す力 (コミュニケーション力)

と定義していた。情報端末機器の発達と利用年齢の低年齢化に伴い、人と人との繋がりが薄れつつある。そのような時代だからこそ、「聞く力」「受け止める力」の育成に真摯に向き合い、「未来をたくましく切り拓く」人材育成に尽力していきたい。



「チーム針持」による課題解決への取組

針持小(始伊) 森 章 郎

一 はじめに

本校は、伊佐盆地の最も南側に位置し、標高二〇〇mの高さにある。校区は四〇〇m程の低い火山灰土からなる丘陵地帯に十三の集落が散在している。冬は冷え込みが厳しく、年間を通して冷涼である。校区の方々は、教育に対する関心が高く、学校の行事や環境整備等に対して極めて協力的である。

現在、児童数は十九名で、特別支援学級二学級を含む五学級で編制されている。

二 学校経営の方針

本年度の学校教育目標は「一人一人が思いやりの心を持ち、自ら学ぶ意欲と実践力を備え、たくましく生きる子供の育成」とし、学校経営の教育課題を次のように設定した。

- (一) ICT活用による確かな学力の定着
- (二) 基本的な生活習慣の定着
- (三) 生徒指導の充実と心の教育の推進
- (四) 健康で安全な生活態度の育成
- (五) 安心・安全な学校づくり
- (六) 地域とともにある学校づくり

三 教育目標達成(課題解決)への特色ある取組

職員数が九名と少ないため、課題解決に向けて「チーム針持」のもとに全職員の力を結集して取り組んでいくことを、今年度初めからくり返し呼びかけてきた。

(一) ICT活用力の向上

パソコンが苦手という職員もいるが、子供たちとともに学ぶ気持ちで取り組めるよう声掛けを行ったり、担当者が講習会で学んできた内容をもとに、職員への伝達講習を行ったりしながら、職員の技能の向上に努めている。最近では、ロイノート等を活用した実践的な学習に取り組む姿も見られるようになってきた。また、今年度は子供たちのタブレット活用力を伸ばすために、朝の活動の木曜日の枠を「ICTタイム」として設定した。その時間は、学習支援アプリ等に取り組ませている。また、タブレットの家庭への持ち帰り学習にも取り組み始めた。保護者の協力をいただきながら徐々に活用の幅が広がっている。

(二) 生徒指導の充実

本校は小規模校であることから、学校で

の活動では、子供たちは仲よく協力しながら進める場面が多く見られる。しかし、それぞれに個性があり、時にはトラブルも発生する。そのような事例に対しては、全職員で対応していくこととしている。本年度は、毎週水曜日の放課後、生徒指導連絡会を実施して共通理解を図るようにした。その中でトラブルの現状把握と、指導の在り方の検討を行っている。子供たちを全員で見守る雰囲気づくりに取り組み、例年どおり不登校ゼロの目標達成に向かっていく。

(三) 地域とともにある学校づくり

コミュニティスクールとなり、四年目を迎えている。この数年、コロナウイルスの影響を受けながらも、できる範囲での活動を進めている。特に、中学年が中心に学習する米作りの学習では、高齢者の方々が田植えや稲刈りに十名以上参加し、子供たちに指導していただいた。子供たちにとって、ふれあいなどの学習ができる貴重な体験の場となっている。今後も、地域の方との連携を工夫しながら「地域とともにある学校」としての責任を果たしていきたい。

四 おわりに

市の研究指定を受け、来年度の公開に向け日常の業務を進めながらも、全員で研究の推進に努力している職員の姿を見て、一人一人の中に「チーム針持」の気構えが確実に育っていることを、校長として頼もしく思う。今後も教育課題の解決に向けて「チーム針持」の旗振りをしっかりと行っていきたい。



岩岡の子が輝く学校経営

地域・保護者との連携をとおして

岩岡小(熊) 鮫島孝則



岩岡小マスコット
「ガンちゃん」

一 はじめに

岩岡校区は中種子町の南西部に位置し、細長い海岸線に沿った丘陵地に農耕地と山地があり、四つの集落に約百八十一戸が住む。明治二十二年の創立以来、今年度で百三十四年目を迎える。主な産業は、農業が主体で甘藷・さとうきび・稲作を主とした生産が行われている。海岸には面しているが、漁は自家用程度である。

二 学校経営方針

本年度の学校教育目標は、「心豊かでたくましく、ひとみかがやく、岩岡の子を育てる」に設定し、キャッチフレーズを「ウミガメと花と一輪車の学校」とした。また、学校経営の重点として

- (一) 道徳と人権同和教育の充実
- (二) 分かる授業による学力向上
- (三) 継続的な気力・体力つくりと安全教育の充実
- (四) 職員の資質向上及び業務改善の四つの柱で取組を推進している。

三 特色ある教育活動

- (一) うみがめ留学生の受入れ
中種子町では平成十一年度から「たねが

しま里親留学制度」を実施しており、本校も平成十四年度から児童数の減少に歯止めをかけると共に、留学生と地元の子供の相互の教育効果を狙って留学制度(現在はうみがめ留学制度)を取り入れている。本年度で二十一年目になり、これまでに九十二名を受け入れている。カヌー体験や屋久島旅行、ウミガメの観察・放流、ロケット打ち上げ見学など様々な行事を行っている。また、行事はこれまで里親を経験された方々や地域の方々の協力があつて成立する。

(一) ウミガメ保護活動及びSDGs

学校の近くに長浜海岸がある。毎年初夏になるとアカウミガメの産卵が始まる。夏休みになると孵化が始まり、海へと戻っていく。アカウミガメは絶滅危惧種に指定されている。学校には孵化場があり、アカウミガメの採卵から孵化、放流を通して観察を行っている。また、種子島で活動しているタートルクルーを招聘し、ウミガメについての話を聞いたり、今年度から、「SD

Gsデー」を毎月一回設定し海岸清掃を行ったりしている。今後のウミガメの観察や保護活動に役立つ内容であった。

(二) 保護者が主体となる体験活動

ア 親子駅伝大会

岩岡小の伝統行事に親子駅伝大会がある。近くの長浜海岸で行われ、砂浜を駆け抜けながら親子でたすきを繋ぐ恒例の行事である。この岩



岡小での取組が町の行事(町内一周駅伝大会)の開催に発展したと言われている。

イ 親子読書発表会

昭和五十三年に、「母と子の読書学級」の研究公開が行われ、全国・県・地区の表彰を受けた。それから現在に至るまで「親子読書発表会」としてPTA研修部を中心に発表会を行っている。そして、年度の終わりに文集「くろしお」を発行し、親子にとって思い出の一冊となっている。

四 おわりに

毎年六名前後の留学生を受け入れている。この自然豊かな種子島で学び、地元の子供たちと切磋琢磨し、伸び伸びと活動している。留学生は思い出深いこの地に、人生の節目で帰ってくる子供もいる。自分たちの住んでいる地域に誇りをもって、いつまでも岩岡の子が輝けるような学校経営を進めていきたい。



「笑顔輝け 中津っ子」の育成のために

中津小(北) 那 須 広 代

一 はじめに

本校は、薩摩川内市から西へ約三十キロの甕島にあり、明治十年に開校し、創立百四十六年を迎えた。その間、宇佐小、浦内小、江石小、平良小の四校が中津小に統合されながら一つの学校となった歴史がある。校区が大変広く、「鹿の子大橋」や「甕大明神橋」を渡り、スクールバスで通う児童もいる。本年度の児童数は二十名で、複式三学級、特別支援学級一学級の極小規模校である。本校では、学校教育目標を、「ふるさと愛」「確かな学力」「豊かな心」「たくましく生きる」子供の育成とし、中津の教育的風土を生かしながら、日々の教育活動の充実に取り組んでいる。

二 取組の実際

(一) 豊かな自然とふれあい活動の実施

ア 豊かな自然のよさを体験する活動として、三～六年生は、学校近くの中甕港で、学校応援団の方に指導をいただきながら「カヌー学習」を行っている。上学年と下学年の児童がペアを組み、教え合いながら取り組んでいる。青く澄んだふるさ

との海を間近で感じられる子供たちが大好きな活動である。

イ 三・四年生のふるさとコミュニケーション科の学習では、「ふるさとの人々とふれあう活動」を設定している。隔年で甕島の方言を教えてもらったり、漁船に乗せてもらったりしたことをもとに自分たちで探求していく学習を行っている。人とのふれあいの中で甕島のよさを実感できる活動となっている。

ウ 一・二年生を中心に併設する幼稚園児との交流活動を行っている。生活科の学習では、幼稚園児を招いて自作のおもちやで一緒に遊んだり、芋植えや収穫、食

する活動をしたりして交流している。年少者への心づかいや優しい口調で教えるなど相手のことを考えた行動ができるようになっていく。また、昼休みには、全児童が幼稚園児と一緒に遊ぶ姿も見られる。その他、運動会や音楽発表会などの学習を合同で行っている。幼稚園児との交流が、思いやりの心の育成につながっ

(二) 読書活動の充実

ている。

ア 学期一回、読書月間を設定し、読書郵便、おすすめの本の紹介、ビブリオバトル、読み聞かせなどを行っている。特にビブリオバトルは、二学期に各学級でのバトルを実施し、その活動を生かして、三学期に学校全体でのバトルを行っている。一冊の本とじっくり向き合う活動となっている。

イ 図書室には、常に図書委員会からのおすすめの本が紹介されている。四月は、一年生へのおすすめの本が紹介され、どの本にするか迷っている一年生がスムーズに借りることができた。また、できるだけ図書室へ行く時間を確保することを意識し、すき間時間などを活用している。昨年度の平均読書冊数は、二百七十六冊だった。時間があるとしつくり本を読んでいる児童の姿がよく見られる。

三 おわりに

甕島には、高校がない。子供たちは、中学校を卒業する十五歳の春に「島立ち」をする。甕島で育った誇りと感謝の気持ちを持ち、心豊かな生活ができる力を身に付けさせ「島立ち」を迎えさせたい。一人一人のよさに目を向け、全職員で声をかけ、認め励ましながら小規模校の強みを生かした教育活動を実践している。今後も「ふるさとを愛し、心豊かで笑顔輝く中津っ子」の育成に取り組んでいきたい。



「三星健児」を目指して

百年の歴史を振り返りながら

鹿屋高(隅) 白石 秀 逸

一 はじめに

本校は、大正十二年四月に開校した鹿児島県立鹿屋中学校及び大正十四年四月に開校した鹿屋実科高等学校を前身とし、来年度創立百周年を迎える。

本校の校章は三星と称され、三つの光芒は「知」「徳」「体」を表している。この三者の調和的向上発達を目指し、「知・徳・体」を校訓としている。校訓の具現を目指し文武両道に取り組み生徒たちをいつしか「三星健児」と呼ぶようになった。

特色ある教育活動として昭和四十年代から続く「生徒朝礼」と「生徒主張」及び大隅の自然や地理及び歴史を題材とした「野外実習」がある。これらと同窓会の主催する「三星塾」や「国内外交流支援」とを併せて紹介したいと思う。

二 「生徒朝礼」と「生徒主張」

昭和四十六年、生徒会執行部の進行による「生徒朝礼」が実施されるようになり(教職員も交えたものは全体朝礼と呼ぶ)、会長挨拶や生徒有志による「生徒主張」及び部活動報告が行われるようになった。半世紀以上経った現在でも「生徒朝礼」と「生徒主張」は続いている。昨年度は一学期途中からスーム

を利用しての配信で実施したが、今年度は体育館にて従来の形で実施できている。

全体朝礼は月二回のペースで計画され、全体朝礼の前に「生徒朝礼」を実施している。生徒会役員がマイクと階段をセッティングし整列指導まで行う。完了次第、生徒主張へ移行し連絡等で終了する。職員による指導はほとんどなく、すごい生徒たちだと毎回誇らしく思う。生徒主張は自薦他薦を問わず各クラスから代表一名が選出され、二年生と三年生の一組代表から初回をスタートし、第七回からは一年生と二年生に担当が変わる。演題は各自主張したいもの何でもありで、体育館のステージから生徒・職員に向けメッセージを贈る。その後全体朝礼に移り、校長講話の中で助言や感想を述べるようにしている。

三 「野外実習」

一年生を対象として昭和四十五年に桜島で第一回を実施し、第三回からは鹿屋・串良・東串良・高山・吾平をめぐるコースへ変更された。事前に内容を学習し一日がかりで各地を回る。実習後のレポート作成までを通して、大隅の自然や地理及び歴史について理解を深める。郷土への誇りと将来を担う気概を持った人材育成につなげることを目指している。

昨年と今年は感染拡大防止の観点から規模や日程を縮小しているが、一気に導入が進んだICT機器の活用により、次年度以降は新たなスタイルが確立できるかもしれない。

四 同窓会による「三星塾」と交流支援

創立八十周年記念事業として同窓生による記念授業を実施した。第一回の講師陣は大学助教授をはじめとし弁護士や出版社社員など二十五名で、生徒は大いに刺激を受けたと記録が残る。コロナ禍のため昨年実施予定だった第七回は一年遅れで今年実施できた。生徒たちにとって在学中に一回ではあるが先輩からのメッセージを基に生き方について考える機会となっている。ちなみに今回も東大教授から地元のパティシエまで多士済々であった。

また、来年度の百周年事業として国内外への人材派遣を含めた交流事業を計画していた。主体的な学びへとつながり、人材育成の一翼を担ってくれることを願っている。

五 おわりに

大隅地区の過疎化や高齢・少子化が急速に進んでいることは、鹿屋市を含め大隅教育事務所管内の様々な会合で手にする資料が雄弁に語っている。教育の振興なくして郷土の発展はないといわれ、その一翼を担ってきたとの自負がある。今、より一層、郷土を愛し郷土の未来を描ける人材育成が期待される。これからも地域や同窓会の力をお借りしながら未来を支える「三星健児」の育成に努めていきたいと考えている。

(参考資料)

「みんなで作り上げる鹿屋高校沿革史」
「ぼっけもん・いさあ三星年表」



そいじゃつがー

宇宿小(市)末 永勝 也

定年まであと〇年と言い聞かせ、なんとか踏ん張ってきたが、ゴールが延ばされ私同様に溜息をついている同期たちの姿が目浮かぶ。そんな心が沈むような出来事があるといつも心の中に現れる恩師がいる。

昭和四十七年、私が小学三年生の時に太陽国体が開催された。川内市では一般男子バスケットボール競技が行われ、全校児童で観戦した。「こんなスポーツがあるんだな」と、興味を持ったその二年後、母校に初めてミニバスケット

ボールスポーツ少年団が結成された。監督は大学で競技経験のある辻原繁治さんという方で、バスケットはもちろんのこと、練習が終わると自宅に呼んで食事を振る舞ってくださるなどみんな大好きな監督だった。

そんなある日の練習。恒例の体力づくり(新田神社の階段上り)の後に紅白試合が行われた。ゴール目指して夢中で攻撃している最中にある閃きが生まれた。パスを出してフェイントをかけ相手を振り切り走り込めばフリーでシュートできるのではないかと(いわゆるカットイン)。思いどおりにシュートが決まった瞬間、体育館中に監督の大きな叫び声が響き渡った。

「そいじゃつがー、すえながー。」
チームメイトからの称賛、達成感、そして何より大好きな監督に褒められた喜び、言葉に言い表せない喜びの感情が湧き上がった。その後はもっと上手になりたい、監督に褒められたい一心で頭の中はバスケット漬け。あつという間に少年団の楽しかった時代は過ぎていった。

教員となって、子供を適正に評価し認めて心から褒めることが恩返しと決め、ここまでやつ

てきた。人を動かすことのできるのは、嘘偽りない心からの言葉であると思う。もう亡くなられたが、また監督さんに会いたいと思う今日この頃である。



残り姿から：人が環境をつくり、

環境によって人が育つ。

開聞中(南) 久 徳 寛 司

私が初任校で初めて担任を任せられ、生徒たちとの人間関係づくりや学級経営に悩んでいた時に、当時の指導教官の先輩先生からいただいた助言が、「生徒たちが帰った後の教室の『残り姿』を見いやんせ。生徒の座っていた机や椅子・棚を見ると子供たちのその日の心の状態や学級の様子が見えてくる。」という言葉でした。

それから子供たちと一緒に過ごす教室をどのように工夫すると居心地の良い学習活動に集中できる環境がつけられるのか考えていくようになりました。同じ学年の隣の教室や他学年の設営はどのような工夫がなされているのか。研究公開などで他校を訪問した際は、どのような取組を行っているのか写真で記録を残しては、自分なりに真似たりアレンジをしたりして教室設営に取り入れてきました。また、生徒たちが帰った後の教室を見回り、机や椅子を整えたり、棚や掲示物をチェックしたりする習慣化に努めました。このような取組を続けているうちに、わずかな変化に気付けるようになり学級や学校の

雰囲気が変わると子供たちや先生方の気持ちも変わっていくことを実感できるようになりました。

三校目の学校で昼休みに、生徒が「先生、大変だ。A君がケガをして動けない。すぐ来て。」と叫びながら準備室に入ってきました。呼びに来た生徒と一緒にA君のもとに駆け付けると、A君の足先に農具用のフォークが突き刺さり、今にも倒れそうな状態でした。その様子を見て、咄嗟にA君が倒れないように抱き支え、駆け付けてきた先生方と一緒に泣き叫ぶA君に救急車が来るまで頑張れという声掛けしかできない壮絶な体験をしました。この経験は、「子供たちが安心して過ごせる安全な環境づくり」がいかに大切か、改めて認識させるものとなりました。今でも管理職として毎朝、正門付近の掃除をしたり見回りを続けたりして、先輩からいただいた言葉の有難さを実感しています。『残り姿から：人が環境をつくり、環境によって人が育つ。』この言葉は、これからも大切にしていきたいです。



花には水を、人には声を

重富中(始伊) 安 藤 晋 哉

教員生活三十六年目を迎えている。これまでの教員生活を振り返ると、多くの先輩方から様々な金言をいただき、心を奮い立たせたり、気持ちを落ち着かせたり、その言葉を胸に子どもたちの教育に正面から向き合ったりしてきた。その中でも、ある教育長が話された「花には水を、人には声を」は「教育愛」の根幹を突いた言葉であり、私自身とても好きな「心に残るひとこと」になっている。

花に水をやることは、花の成長には欠かせない。それとタイミングも大切。暑い夏の日、二日ほど留守にして水を与えなければ、花は萎れてしまい、場合によっては枯れてしまうことも。また、水を与えるとき、ただ水をかけるのではなく、花と会話をするように「このくらいでいいか」「もう少し欲しいか」と声かけしながら、花の姿を観察し、成長の様子に気を配りながら、その状況に応じた水の与え方もあるということだ。花の元気な姿は私の心の安定と元気につながっている。

一方、人への声かけもこの花への水かけと相

通じるものがある。あいさつとは別に、人への声かけをするときは、相手の様子を観て声かけの内容やタイミングをはかる。「今なのか、ちよつと間をおくか」を判断し、声かけすることがある。これは、その人の表情や全体的な雰囲気、その時の状況などをもとに思いを巡らしながら、その場に応じた声かけをするものである。そこまで気にしなくてもいいかもしれないが、私としてはこの方法が習慣というより習性になっている。

「花には水を、人には声を」という言葉は、植物、人間その他の様々なものを「観る」・「育てる」・「保つ」というときに心に留めておく言葉であると同時に、相手に対する気配り・愛情表現であると考えている。

本校の正門前には本校職員が育てたプランターの花が設置してある。毎朝、その花に水をやり、登校する生徒たちに「おはよう」と朝一番のあいさつをし、「今日も一日中充実した一日になるよう元気にいこう」とつぶやきながら一日の始まりを迎えている。

人を育てる大切な仕事を担うことができるのもそう長くはない。

「花には水を、人には声を」を胸に一日一日を大切に生活していきたい。

現状維持は後退に等しい

大川内中(北)小 磯 竜一郎

今年度、本校に赴任して間もなく、今回の執筆割当てを聞かされてから、何について書こうかといろいろと考えあぐねていたが、今回は表題の言葉にした。おそらく、さほど珍しい言葉ではないだろうと思うし、だからこそ、その意味も分かっていただけのことと思う。だが、わたしにとつては、文字どおりわたしの中に長い間残っており、拠り所となっている言葉の一つなので、この言葉にした。

わたしの記憶の中では、この言葉との出会いは、二十年近く昔に遡る。教頭職初任校でのことである。当時の校長先生からの御指導の中でいただいた言葉であったと記憶している。どのような場面で何についてだとか、その詳細までは思い出せないのが申し訳ないのだが、おそらく学校運営の推進について話しているときだったろうと思う。そのとき、「小磯さん、現状維持は後退やっただでな。」というように言われたと覚えている。心して、前に進めねばという意味で言われたと受け止めている。この先生には一から教えていただいた。おそらく、初任の

わたしを一人前に育てようとの思いが十分にあられたのだろうと思う。だから、折に触れ語ってくださり、いろいろな言葉もいただいた。それらがあつて、今のわたしがここにいるのだとも思っている。

とはいえ、この言葉の意味は分かっているものの、自校の教育活動を見直し、そして改善を加えて前進させることは、決して容易なことではないのもまた、皆様御承知のとおりであろう。なにせ、学校というところは、一年を周期に人が入れ替わるのだから。児童生徒に加え職員はもちろん、保護者やそれを取り巻く地域も、その構成は変わっていく。だから、簡単には前に、次に進めない。そんなことから、わたしは、いつの頃からか一年契約のつもり、毎年ゼロからのつもりで取り組むようにしている。毎年同じところから始めつつも、目の前の子供たちを中心に置き、現状維持となることなく、この子たちにより良い教育の実践のため、先を見据え一歩でも半歩でも歩を進めよう。





学校で勉強することの意味は？

伊敷小(市) 赤 岩 道 春

おはようございます。みなさんに一つ質問したいと思います。

なぜ、皆さんは勉強しなくてはいけないのでしょうか。皆さんだけでなく大人になってからも勉強はしなければならないと思っっているのですが、さあ、なぜでしょう。

こんな人がいます。パキスタンという国では、武装勢力のタリバンによって女子が学校での教育を禁止されていて、このことに反対した中学生の女の子がいました。その人の名はマララ・

ユスフザイさんと言います。マララさんは、女子が学校で教育を受けられないことを世の中に訴えたことで武装勢力タリバンから命を狙われるようになりました。そして、ある日マララさんは、中学校から帰る途中でスクールバスに乗っていたところを銃で撃たれ、頭と首に計二発の銃弾を受けました。重症だったためにマララさんは、イギリスの病院に運ばれ手術を受けて何とか助かりました。マララさんは、命にかかわる重傷を負った後も学校の大切さなどを訴え続け、十七歳にしてノーベル平和賞を受賞しました。そのマララさんが国連でスピーチをしたとき、こんなことを言っています。「一人の子供、一人の教師、一冊の本、一本のペンがあれば世界を変えられる。」これは、学校で勉強することがどんなに大きな力になるかを語っています。世界には、勉強したいけれども学校にいけない子供たちがたくさんいるのです。みなさんは、自分さえ、その気になればいつでも勉強できる環境にあります。このことに感謝し、今を大切にしてほしいと思います。

また、マララさんはこのほかにもスピーチの中で、「暴力には何の力もないこと」を訴えて

います。相手が気に入らないとか、自分の思いどおりにできないからといって暴力を振るっても、何の解決にもなりません。暴力でなく、正しく考えて、解決する力をつけるために学校で勉強するのです。みんなと理解しあって、よりよく生きるために勉強することが大切です。皆さんもこのことをじっくりと考えてみてください。

やる気スイッチ

高隈小(隅) 田 中 浩

今日はピタゴラススイッチではなくて、やる気スイッチの話します。このやる気スイッチは、「さあ、授業を頑張ろう。」とか、「宿題を早く終わらせよう。」とか、「楽しみにしていた本を読もう。」とか、「お母さんの手伝いをしよう。」とか考える時に、自分の心の中で自然に押されるスイッチのことです。このスイッチが入らな

ければ、なかなか集中できませんし、自分のものになりません。授業にも集中できないし、本の中身も忘れてしまいます。そうです。何かを始めようとする時には、必ず「元氣」「勇氣」「やる氣」が必要です。いやいやながらやっても、何の効果もありません。授業を参観すると、朝から眠そうにしている人もいます。そうじもいかげんにして、サボる人もいます。家に帰っても宿題や手伝いよりも先にゲームを何時間もする人もいます。もう、気付きましたね。やる氣スイッチが入ってない人がこうなります。

ただ、このスイッチは一つだけ注意が必要です。それは、何かわかりますか。実はこのスイッチは自分自身が押さなければダメだということです。友達や親から、「勉強しなさい。」とか「本を読みなさい。」とか言われても、逆に勉強をしたくなくなったり、本を読むこともいやになったりします。覚えていてください。やる氣スイッチは自分が押すしかないということを。さて、今から始まる一日のやる氣スイッチは押せましたか。

みんなのために

自分ができることを精一杯

校内駅伝競走大会開会式にて

天城中(大) 平田 睦

人権週間ということで、昨日は、生徒会役員のみなさんがスイミーの手作りパネルシアターを披露してくれました。小学二年生の頃を懐かしく思い出した人も多かったことでしょう。

一匹だけ黒い魚、スイミー。大きな魚に負けない方法をみんなのために一生懸命に考え、「大きな魚のふりをすること」を思い付きます。魚たちを励まし、練習して、みんなで大きな魚のふりして泳げるようになります。朝の冷たい水の中、昼の輝く光の中、スイミーたちは、堂々といつでも泳げるようになりましたね。

この物語のテーマはいくつかあると思います。私がみなさんと共有したのは次の三つです。一点目は、みんなで知恵を出し合い、互いを信じて力を合わせるということ。二点目は、「ぼくが目になろう」と言ったスイミーのよう

に、自分の個性に自信をもつということ、自分の個性をみんなのために生かそうと行動できるということ。三点目は、つらいことを乗り越えることや、大きな目標に挑むことの意義。がんばって乗り越えたあとに、スイミーたちの周りには、すばらしい、これまで見たことのない世界が開けていましたね。

さあ、明日はいよいよ本番。一人一人の思いを込めた走りを結集してください。チームのために、自分を信じて、あなた自身の精一杯の走りをを見せてください。苦しいときも、一人で走っているではありません。次の走者が、チームのみんなが待っていてくれます。がんばった後には、スイミーたちのように、すばらしい感動的な瞬間が訪れることでしょう。襷に自分の思いを込めて、みんなの思いをつないで、ゴールを目指しましょう。



話のひろば



笑顔と共に

持松小(始伊)

七夕 健 一

「校長先生、こんにちは。」中一のAさんが、校長室へ明るい表情で顔を見せてくれた。「学校はどう、楽しい？」と尋ねると、ちよつぱり照れながら「勉強は難しいけど、少し成績上がりました。」と話してくれた。また、「先日は校内の駅伝競走大会で区間一位を獲りました。」と笑顔で話してくれた。Aさんは、毎朝、スクールバスで登校している。校門前では、他の中学生が乗車するために、私と数秒ほど顔を見合わせる。窓越しからであるが、いつも笑顔で一礼してくれる。「行ってらっしゃい」と両手を大きく振って見送っている。

さて、ここで、ある某大学ラグビー部での話である。指導者である本人が、学生時代に一緒

に行つたお悔やみの帰りに恩師から言われた内容である。

「いつも笑顔だけは忘れるな。人生もだがラグビーでも真剣になればなるほど笑顔が大事だ」と話されたそう。そこで、指導者となつた彼は、練習開始前、円陣を組んだ後に、選手はおもむろに隣同士二人一組向き合い「笑顔の確認」を流儀として取り入れている。筋肉隆々の大男たちに対して、特別な指導でもなく斬新な指導でもない、ちよつとした儀式である。だが、この指揮官は、選手たちが、どんなマインドで試合に向き合うことが大切かを模索する中で、恩師の言葉に辿り着き、今実践し取り組んでいる。

また、相手の目を見て話すことや使つた道具は使つた者が片付けようと挨拶と掃除について、ラグビー以外で求めている。余談であるが、夏の合宿中に複数の同宿チームの取材を兼ねて宿舎を訪れると、誰にでもしっかりと挨拶をしていたのが、某ラグビー部のファイティーンだったそうだ。

本校でも清掃活動などの凡事、つまりささいなこと、ありきたりのことをやり遂げることの大切さを改めて感じる日々である。

明日の未来を担う子どもたちの可能性を引き

出すことができるよう、自ら人としての根の部分を太く強く生きていきたいものである。

学校応援団の活用 と島の宝の発掘

阿権小(大)

曾田 巖

「Kくん、がんばれ。もう少しでゴールだ。」男子一人に先導の高校生、横には母親、後ろから社会人が並走し、ゴールまで声援を送り続ける。児童数よりずっと多い数の地域の方々、共に走りながらであり、沿道からであつたり応援の声が絶えない。昨年度の校内持久走大会の様子である。

本校の地域行事や学校行事には、児童や保護者、地域の高齢者だけでなく、中学生や高校生若い社会人も係や選手として参加し、一緒に後片付けまで活動を共にする。

それは、徳之島では珍しい六月灯や、校区合同の大運動会、文化祭、校内持久走大会、子ども会主催の歩こう会等でも、同じ光景を目にする。奉仕作業やクリーン作戦でも大活躍である。

その他に、一年から三年児童を対象にした放課後見守り隊も、大変ありがたい存在である。

五校時で早く終わる下学年の児童を、学校の横に隣接する福祉館で、地域の高齢者が交替で上学年の姉や兄を迎えにくるまで見守ってください。

また、田植えや稲刈り等の米作り、年々規模が大きくなってきているじゃがいも生産や野菜等、関係機関や多くの方々からの御指導や御支援をいただき、児童も毎年、収穫を楽しみにしている。

本年度から、地域の方々からの島口指導も、文化祭までであったものを通年とし、児童も年々上達していると、高齢者に大変喜ばれている。

トライアスロン参加者や学会等で来島した方々、他校から訪れた小学生等を対象にした島っ子ガイドも、年々、バージョンアップしている。島や地域の宝を、児童の澄んだ眼で探し出し、ユニークかつわかりやすく紹介している。

学校を支えるたくさんの方々には感謝しつつ、この地域の教育力を最大限に活用すると共に、自分たちでも、さらに、誇りに思う地域の魅力を見つけ、守り続けていく努力を、これからも続けていきたい。

きょうだい

大島養護(大)

福 永 憲 一

養護学校での勤務を通して、これまで多くの障害のある子どもと関わってきた。子どもにはいつ

も温かく見守ってくれる保護者がいるとともに、兄や姉、弟、妹など「きょうだい」がいた。そして、運動会や学習発表会などには必ず親の袖や服を握ってそばにいた。

障害のある子どもは体や心の発達の面で母や父の並々ならぬ多くの愛情が注がれている。きょうだいに向けられるはずであった愛情や時間も場合によってはその子どもに向けられたであろう。「なんで、どうして」というきょうだいの心の声が聞こえてきそうである。きょうだいまで行き届かない両親の申し訳ない気持ちは、きょうだいの精神的な成長にも影響するであろう。「親に甘えられない、心配を掛けられない、自分のことは自分でする」など、親に負担を掛けられない自立心は、ある意味きょうだいに我慢を強いることになる。それがプラスになつたりマイナスになつたりしながら、きょうだいの児は育っていく。財団法人国際障害者年

ナイスハート基金による「障害のあるきょうだいへの調査報告書」の中で、全国障害者とともに

に歩む兄弟姉妹の会の加瀬みずきさんは次のように述べている。「障害のある人のきょうだいは幼い頃から、社会の差別や偏見、独特な家族関係、情報不足などの負荷を受け続けており、そのことが人間形成に与える影響は大きい。しかし、きょうだいはハンディをプラスに捉える意思や前向きに生きる力をもっている。」

私がこれまで関わった家族を見ると、障害のある子どもが常に家庭の中心にあり、母親、父親、きょうだい周囲を温かく取り囲んで生活している。「転ばずに歩けるようになった」、「スプーンを使って食事ができるようになった」など、話題の中心だ。私が担任した生徒の妹が、特別支援学校の教師として同じ職場で働いたことがある。子どもたちへの力強く、温かい指導が印象深い。

私たちが日々接している障害のある子どもの向こうには、きょうだいがいる。目の前の子どもだけでなく、そのきょうだいの成長を支え、見守ることができる心の余裕をもって接していきたい。



読書案内



父の姿を思い返すことができる。

本書三冊には、鹿児島県内（離島も含む）の四百五十余りの昔話や伝説が方言を交えた形で収録されている。父が昭和三十年代から五十年代にかけて、県内各地の民俗調査の折に集めた千余りの話の中から文字化したものである。

父の書齋には、当時の取材ノートや写真フィルム、話者の話が録音されたオープンリールやカセットテープ等が大量にあった。台所の片隅には、カセットテープレコーダーと原稿用紙があった。昔話を録音テープから文字化するのは母の仕事だった。家事の後でイヤホンを耳に当て、ペンを走らす母の姿が懐かしい。

昔話は、人の口から口へと伝えられた口承文芸といわれる。しかし、父に昔話を聞かせてくれた話者は、ほとんど他界されているため、今後、その土地の方言で語り継ぐことは難しいだろう。本書は、そのような昔話を知ることができる貴重な資料であるともいえる。

収録されている昔話には、方言と標準語が織り交ぜてあり、難解な漢字や方言にはルビも振ってあるため、小学生でも楽しむことができる。三冊の中に赴任先の昔話を見付けたい、その土地の方言で読み聞かせをしていただきたい。校区の高齢者に読んでいただく方法もある。「昔話のふくよかな味わい」を楽しんでほしい。

南方新社

鹿児島ふるさとの昔話

一八〇〇円

鹿児島ふるさとの昔話2

一八〇〇円

鹿児島ふるさとの昔話3

二〇〇〇円

■大村はま 著

灯し続けることば

高山小(隅) 二 善 宏 也

地区フレッシュ研修（初任校一年目研修）で初任者の先生方に話をする機会を得た。初任者の先生方にとどのような話をするか迷っていたときに、この本のことを思い出し読み返すことにした。

本の帯に「生涯一教師・大村はま、九十八歳の珠玉のことば 子どもにもかかわる、すべての大人に」と書かれてある。大村はま先生が、教育や教師についていろいろな場で話された、書かれたりしたことをコンパクトにまとめた本である。読まれた方も多いと思う。

「子どもに向かって、忙しいは禁句です。」の

鹿児島ふるさとの昔話・2・3

■下野敏見 著

穎娃小(南) 下 野 彰 久

「地域の古老に、さるかに合戦や浦島太郎の話を知っているかと尋ねると、『まあ座れ』と言われ、たくさんの昔話をしてくれた。」

著者である父から何度も聞かされた取材の様子だ。現任教への赴任を伝えると、穎娃町青戸の話者について懐かしそうに語ってくれた。三十話ほどの昔話を聞いたこと、温和な方だが愉快に話してくれたこと、青戸小から臨む海や畑、開聞岳は絶景だったことなど。父が他界して一年が経つが、本書にある話者とのやりとりから、

ことばはうなずくものがあつた。多忙ということばは学校現場でよく飛び交っている。

「子どものことは、どんなに忙しくてもほかのことを何とか都合して、ゆっくりやらなければならぬ、教師の本来の仕事です。」と大村はま先生は言い切っている。ちよつとしたことばでこんなにも違うものだと思う。「忙しいから、後で見てください。」「ああ、ちよつとそこに置いておいてね。」「忙しい。」と言われたら、何か排除されたような、拒絶されたような気持ちがする、と子どもの心理状況も説明している。生徒指導の問題行動等が起きると、職員は忙しいから、子どもと接する時間がないということがある。しかし、ふれあいはいつでもできる。給食時間や掃除時間のちよつとした語らい。授業のささやきなど、その機会は多くある。教師は、子どもときちんと向き合う人でありたい。もちろん、管理職であっても同様である。大村はま先生のことばが、常に私を初任者のころの初心に戻してくれるように思う。今は、「子ども」を「職員」に置き換えて読むと、「ああ、まだこれできていないなあ。」と自分を振り返りながら読むことができる。校長として、自分の学校経営を振り返らせてくれる一冊である。

小学館 一〇四七円

■稲盛和夫 著

「生き方」

―人間として一番大切なこと―

指宿商業高(南) 清川 康 雄

京セラの創業者で、日本航空(JAL)の経営再建にも尽力された稲盛和夫さん。八月二十四日、老衰のため、九十年の生涯を京都のご自宅で閉じられました。その経営理論は、学校マネジメントとも無関係でないように思えます。

本書のタイトルとして掲げた「生き方」とは、一個の人間としての生き方のみならず、企業や国家、さらには文明あるいは人類全体までを視野に入れていきます。なぜなら、それらはいずれも一人一人の人間の集合体なのだから、そのあるべき「生き方」に、何ら差異はないはずだ。稲盛さんは、そう述べています。

挫折を繰り返しながらも、人間としてよりよく生きることに懸命だった青少年時代、経営の実践の中で、人々を成功や繁栄へと導く考え方を追求した経営者時代、そして事業の第一線を退き、信仰を通じて人生の意義について思索を

重ねる現在。人生に対して真正面から愚直に向かい合うことで、稲盛さん自身の「生き方」を少しずつ確立していくことができたようです。

稲盛さんの本書の言葉に「強く思い、実現を信じて前向きに努力を重ねていくこと。それが人生においても、また経営においても目標を達成させる唯一の方法であると言える」「懸命に働き、まじめに一生懸命仕事に打ち込むことによって、精神的な豊かさや人格的な深みを獲得することができるし、趣味や遊びからは得られない、心からわき上がるような喜びを味わうことができる」とあります。

今、教育現場においても「チームとしての学校づくり」が求められています。

学校経営者である校長のリーダーシップの下、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、児童・生徒に必要な資質・能力を確実に身に付けさせることができる学校づくりを求められる校長の姿勢を学びとることができる一冊です。

サンマーク出版 一七〇〇円



趣味について改めて考えてみた。これまで「スポーツや読書、映画鑑賞、旅行」と答えてきたが、どれも広く・浅く、その時に好きなことをやってきただけである。本原稿を作成するにあたり、何を題材とするか迷ったが、今日までの「読書経験」について学生時代から今まで振り返ってみたい。

学生時代は、司馬遼太郎に没頭した。最初に「竜馬がゆく」を読み、感動したことをきっかけに、司馬遼太郎のほとんどの本を読破した。最近、司馬遼太郎の「峠」が映画で上演中と知り、鑑賞した。これは、幕末のサムライである越後藩土河井継之助に焦点をあてた作品である。河井は坂本龍馬と並び

称される世界的視野とリーダーシップを持っていた人物である。幕末時代の人の生き方がよく分かる。あの時代の人々の精神的バックボーンは何だったのだろうか。自分は何をするために生まれてきたのか。深く考えさせられた。

教員になって、先輩方から言われた言葉がある。「本を買って学べ。給料の三分の一は本代にあてよ。」当時は、インターネットもなく、情報欲しさに、時間を見つけて本屋に通い、面白そうな本を物色したものである。

初任校時代に数学の授業で役に立ったのが「○○で数学しよう」シリーズであった。例えばピラミッド。ピラミッドの高さを中学生でも理解できる幾何学の考え方をを用いて求める、というものだ。生徒に数学の考え方のよさを味わ

趣味・文芸

読書から学んだこと

わせるとともに、身近にある数学に気付かせ、興味を持たせる授業の導入で活用させていたことが懐かしい。

三十代のころから、教育関係以外の世界に興味を沸き、特に、経済小説の高杉良はほとんど読みつくした。映画化された作品もある。一人のサラリーマン、一人の経営者が苦しみながらもダイナミックに生きていく。そんな姿に共感した。

このころ、鹿児島大学ゆかりの稲盛和夫氏の本に出会った。不運にへこたれない、思いは必ず実現する、物事の判断基準は「人間として正しいかどうか。」である。人生成功の方程式で

に、「人を動かす」は、これまでの自分の言動、他者との良好な関わりなど考えさせられ、学校経営にも活かせる良書である。

一番心に残っているフレーズは、「人を動かす秘訣はこの世にただ一つしかない。それは、相手に自ら動きたくなる気持ちを起こさせることだ。」意味は分かるが、難しい。言うは易し、行うは難しである。詳細は本書を手にとっていたきたい。項目は、人を動かす三原則、人に好かれる六原則、人を説得する十二原則、人を変える九原則等である。どの章も読むたびに新たな気付きと発見がある。

読書について、全校集会で生徒に伝える言葉

附属中(市) 楠原 豊

は熱意や能力も大事だが「人として正しい、前向きな考え方」が一番大切であることを教えていただいた。

教頭になったとき、当時の教育長から「言志四録」を紹介していただいた。本書は、江戸後期の儒学者、佐藤一斎が書いた語録。指導者のためのバイブルと呼ばれており、西郷隆盛が愛読していたことでも知られている。人はいかに生きるべきか。人生最大の課題である。

附属中学校に赴任し、繰り返し手に取る本がある。デール・カーネギーの「人を動かす」、「道は開ける」、「話し方入門」の三部作である。特

がある。「読書は、自分の人生では味わえない他人の人生を体験できたり、時を超えて、過去や未来の世界を体験できたりする。歴史上の人物と友人になることもできる。本の中の様々な場面で、登場人物の考え方や気持ちを知ることによって、日常生活の中で自分の言動に活かしたり、人の気持ちを想像したりすることもできる。読書って素晴らしい。」

私は、相田みつをの味のある言葉、書が好きで、不思議と心が落ち着く。

「その時の出逢いが人生を根底から変えることがある。よき出逢いを。」

出逢いは人だけではない。ふと巡りあったその一冊が自分の人生をかえるかもしれない。



薩摩の偉人・

郷土の偉人に思いを馳せて

松元中(市) 木原敏行

松元町は平成十六(二〇〇四)年十一月、吉田町、桜島町、喜入町、郡山町とともに、鹿児島市と合併した。薩摩半島の中央部、鹿児島市の西部に位置し、日置市と隣接している。東西七・四km、南北十一kmのほぼ三角形をなし、無数の丘陵と多くの溪谷からなる。自然が豊かであると同時に鹿児島市街地からの利便性も高い。近年は宅地開発が進み、本市の管轄別人口推移をみると、吉野地区と並んで人口・世帯数共に増加傾向にある(合併当時と比べて人口・世帯数共に約一・四倍に増加)。また、本校の生徒数は、平成十六年の合併当時から五百人前後で推移していたが、令和元年には六百人を超え、現在七百人超の生徒が学び舎を共にしている。

本校区内には、J R薩摩松元駅・上伊集院駅があり、四小学校と一県立高校がある。校区が広く、坂道も多い中、生徒の通学方法は、徒歩に加え、自転車・J R・スクールバスと多様である。

さて、明治維新の折、薩摩藩は英国に十五人の留学生を派遣、江戸幕府末期の一八六五年密出国した件は既知の方も多いことと思う。この

時の一行は、鹿児島中央駅前の広場に「若き薩摩の群像」として使節団員四人と合わせて計十九人の銅像が建立されている。では、この群像の塔の一番高い所に駅の方を向いて立っている人物をご存じだろうか。その人物の名は「町田久成」。彼こそは、松元町北部にある石谷の領主であった久長の長男として、鹿児島城下千石馬場の町田屋敷に生まれたという。東京国立博物館の創設者で、日本の文化財保護行政の先駆者とされる。

私は、久成と言えば、村橋久成(日本初の低温発酵ビールを製造したサツポロビールの前身である開拓使麦酒醸造所を設立)のことは知っていた。しかし、恥ずかしながら、町田久成のことは知らなかったのである。本校に赴任し、図書室にあった「知られざる町田久成」の冊子が気になって手に取ってみた。すると、平成九年九月旧松元町時代には、「町田久成没後百周年記念式典」まで催されており、あまり知られてはいないが、本町に係る郷土の偉人なのだということを認識した。「知られざる」は「知ってほしい」の意図があるものであった。

久成は、十五人の留学生を率いる使節団の一人、監督取り締まりの役として一八六五年英国に渡った。久成は、一八六七年のパリ万国博覧会にロンドンから参加している。そこで日本よりはるかに進んだ世界各国の文化や技術を目の当たりにし、世界に遅れてしまった日本を憂い、世界に追いつくために何をすべきか考えたのだ。その際、薩摩藩士と敵対関係にあった幕府使節の田中芳男と出会い、その対立を越えて協力し合い、その五年後には日本初の博覧会を開催し、また、十五年後には国立博物館を創設したのだった。

留学生と使節団は、留学中、各所で当時の最

先端の文化や技術に触れることに、これからの薩摩、日本はどうあるべきか考え、未来を見据えて行動していた。学びたい意欲に満ち溢れていた彼らは、滞在費用が不足し、困難な目にも遭いながら、それでも学びを止めたり、諦めたりはしなかったのである。各人が、自分が今何をすべきか、できることは何かを真剣に考え、それを実際の行動に移していったのである。もちろん、久成もそうであった。

このことは、現代の児童生徒にもぜひ知ってほしい。Socialism時代の到来を間近に感じ、急激に変化する今の時代の中で、可能な限り夢と希望をもって学んでほしいことの一つである。

久成は、様々な大変革期、動乱の世にありながら、日本文化を憂い、文化国家建設のために心血を注いだ。そして、様々な役割を成しながらも、個性的な生き方をし、一切の名声を顧みることなく、最後は仏門に入り、この世を去ったという。

先般、黎明館企画特別展「茶の湯と薩摩」を見学した際にも感じたことだが、薩摩には面白い教材、児童生徒に知らせたいことが豊富に存在する。郷土の偉人「町田久成」を知り、改めてそう思った。知られざる「薩摩の何か」をこれからの教育に生かし、更なる充実を図りたいものである。

【参考文献】

松元町役場企画振興課編集

『松元町閉町記念誌』平成十六年十月

町田久成に学ぶ会

『知られざる町田久成』平成十五年三月

幸運を迎え入れる準備を 日頃からしておくこと。

巡り合わせが以前から
決まっていたとしても
己がすすんでその運を
開拓しないと掴めない。



光の彼方へ（南さつま市）

©K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

新しい年が始まりました。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。
なお、令和四年度の会合は左記のとおり三月に二回予定されています。

- 三月三日 理事会
- 三月十日 評議員会

季節の言葉 「睦月」むつき

琴鼓 ならべかけたる 睦月哉

正岡子規

睦月（むつき）は、仲良くすること・仲睦まじいこと・互いに親しみ合うなどの意味を持つ「睦び合い」の宴を、お正月に家族や親族が集まる月に行うことが由来の睦び月（むすびつき）が転じたと言われています。



編集

後記



明けましておめでとございます。令和五年がスタートしました。
今年には十二支で言えば卯年。卯は穏やかで温厚な性質であることから「家内安全」。また、その跳躍する姿から「飛躍」「向上」を象徴するものとして親しまれてきました。他にも「植物の成長」という意味もあり、新しいことに挑戦するには最適な年と言われているそうです。何か良い事が起こりそうな予感。公私共に新しい挑戦をしたいと思えます。
さて、本校区花尾町には藩政時代から踊り継がれている三つの踊りがあり、鹿児島市の無形民俗文化財に指定されています。その一つが「岩戸疱瘡踊り」です。恐ろしい伝染病である天然痘が蔓延した時に、その予防と早い治癒を神に願いながら踊った真剣な祈りの心が込められた優雅な踊りです。本校児童は花尾地区文化財少年団として、保存会の御指導を受け、花尾っ子フェスタ（十二月）で披露しました。もちろん、新型コロナウイルス感染症収束の願いを込めました。今年こそは、コロナ対応に追われることのない新しい時代の到来を強く希望します。
これから教育課程編成も人事作業も本格化してまいります。令和五年度は「定年引上げ」も始まります。皆様、健康に留意され、新しい年に向けて各学校の教育実践が充実されるよう祈念いたします。
最後になりましたが、御多用な中、玉稿をお寄せくださった執筆者の皆様にご心から感謝し、お礼申し上げます。

山里浩美（花尾小学校）